

## 近世前中期の音楽思想の研究 ―儒学者における礼楽の「楽」―

中川優子(東京藝術大学大学院)

近世の日本では雅楽が復興・普及してくるとともに、儒学を基盤とする学問の発展等を背景にして、種々の音楽論や音楽思想が深められた。本研究は近世前期から中期にかけての儒学者の音楽論を繙くことで、儒教の礼楽思想における「楽」の意義が、雅楽をはじめとする当世の音楽文化との関わりから如何に理解されていたのかを示すものである。とくに近年にかけて精緻な検討が進んでいる楽律学に関する成果にも拠りつつ、これまで注目されてきた荻生徂徠(1666~1728)らにとどまらない代表的な儒学者の雅楽研究や音楽論を掘り起こし、儒学における音楽思想の展開過程を示すことで、儒学者の音楽論を日本音楽史上に正当に位置づけることを目的とした。

論文では、おおむね一章ごとにひとりの儒学者の思想を取り上げるかたちをとった。第1章から第3章は京都の雅楽文化と深く関わりのあった近世前期の儒学者、すなわち熊沢蕃山(1619~91)、中村惕斎(1629~1702)、貝原益軒(1630~1714)の営為や思想について検討した。第4章と第5章では舞台を江戸に移し、近世中期の大儒である新井白石(1657~1725)の雅楽研究や荻生徂徠の楽律研究を扱った。第6章では近世中期における俗楽論の展開として、太宰春台(1680~1747)と蟹養斎(1705~78)の音楽論を取り上げた。このうち中村惕斎や荻生徂徠、太宰春台については先学の知見に多くを拠りながらその思想を見直し、貝原益軒や新井白石らについては雅楽に関する史資料の基礎的調査を経たうえで思想の考察に及んだ。

論文全体の結論として、儒学者の音楽論は机上の空論(大築1966、平野1989ほか)などではなく、むしろ当時の音楽の実態に即して展開したものであることを指摘した。また、彼らの音楽論の根底にある思想は、自身の眼前の音楽文化をつぶさに観察しながら経書にみえる礼楽の「楽」の意義を解釈したものであり、とりわけその本源として歌を重視するものであったことをあわせて指摘した。

今回の発表では、博士論文全体の目的や構成等について述べたうえで、結論の一つである歌の重視に焦点を絞り、近世前期から中期の儒学における歌をめぐる思想の在り方について報告する。